

氏名	鈴木 健太郎		
学位の種類	博士（言語学）		
学位記番号	博 甲 第 8907 号		
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Processing and Interpreting Unknown Words With Morphological and Contextual Information Among Japanese EFL Learners: Focusing on the Semantic Transparency of Morphemes and Learner Proficiency (日本人英語学習者の形態素と文脈情報に基づく未知語の処理と解釈—形態素の意味的透明性と学習者の習熟度を焦点に一)		
主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	卯城 祐司
副査	筑波大学 教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授		久保田 章
副査	関西学院大学大学院 言語コミュニケーション文化研究科 教授		博士（応用言語学） 門田 修平

論文の要旨

本研究の目的は、外国語としての英語（EFL）学習者による形態素と文脈情報に基づく文中の未知語の処理および解釈（推測）を、未知語に含まれる形態素の意味的透明性と学習者の習熟度を観点として検証することである。

単語の形態素にはしばしば未知語の意味に関する情報が含まれている一方、形態素に基づく意味が実際の語義と一致しない形態素が意味的に不透明な語も存在する。そのため読み手が読解中に未知語に遭遇し意味を推測しようとする際、形態素に基づく意味が文脈に支持されているかを判断し（意味関係の把握）、そうでなければその解釈を棄却し文脈を優先した意味を生成すること（意味の生成）が求められる。先行研究では、こうした2つの情報源に基づく未知語の理解の重要性と、とりわけ習熟度の低いものにおける困難性が報告されている。しかしながら、推測の結果に基づく検証が大半で、そのプロセスに対する知見の不足により具体的な困難の所在および必要な支援の在り方については十分に明らかとは言い難い。そのため、本研究では習熟度の異なる中級と初級レベルの日本人英語学習者を対象に、5つの実験を行い、それらの結果をまとめた。

研究1は中級レベルの日本人英語学習者を対象に、読解中の文脈処理と未知語の解釈の関係、およびテキスト理解への影響を検証した。実験1では、協力者は透明または不透明な疑似複合語を含む文脈（1文）を一語ずつ読解し、その後目標文全体を日本語に翻訳した。結果として、目標語の読解時間が不透明語に対して長か

ったことから読み手は読解中に形態素と文脈の情報間の意味関係（一致・不一致）に敏感であったことが示された一方、翻訳課題の結果から不透明な語に対しても形態素情報に基づく誤った字義的な解釈を行う傾向にあった。また、未知語に含まれる形態素の情報が意味をなすよう文脈の解釈を歪曲させる場合が観察された。しかしながら、使用した文脈が1文と短かったこと、読み手の注意が通常読解時よりも未知語に向けられていた可能性が考えられた。そこで、続く実験2では2文からなるパッセージを使用し、読解を通して読み手が未知語に対して構築した意味表象を検証した。協力者はパッセージを1文ずつ読解し、読解後に目標語の意味を問う内容理解問題に回答した。読解時間の結果から、読み手が読解中に矛盾に気づき、意味を推論しようとしていた一方、実験1同様、不透明語に対する字義的な解釈が多く見られ、このことから通常読解では不透明な語の適切な解釈は困難であることが示された。そこで実験3では、明示的に語の意味を推測させる未知語推測課題を用いて、語の解釈および推測プロセスとの関係を検証した。協力者は文内の目標語を推測し、その際に考えていることを口頭にて報告した。その結果、実験1・2と異なり不透明な語に対しても不適切な解釈はほとんど見られず、タスクにおける未知語の重要性の影響が示唆された。また、使用した推測方略を分析したところ、適切な解釈はメタ認知的反応や形態素の字義的な解釈にとらわれない形態素や文脈使用と関係していた。さらに、不透明な語に対する形態素に基づく解釈は、読み手の文を一貫して理解するための心的努力を反映している場合があり、読み手は文脈の解釈を修正することで意味のある解釈を達成しようとしていたことが示唆された。また、研究1の3つの実験を通して文脈の性質が解釈に使用する情報源に影響することが示唆され、有益な文脈では読み手は不透明な語に対して形態素に依存しない解釈をする傾向があった。

研究2は初級学習者を対象に、推測における形態素と文脈の両者の使用に関する困難の特定、および推測訓練の効果検証を行った。実験4では、読み手が形態素と文脈の意味関係を理解できるかを検証するために、協力者は情報間の意味的一貫性を明示的に問う課題に取り組んだ。結果として、読み手の注意を形態素と文脈の意味関係に向けることで、情報間の意味的一致・不一致を概ね理解できることが確認された。そこで続く実験5では、意味の生成に焦点を当てた推測訓練の効果を検証した。協力者（上位群、中位群、下位群）は、目標語の意味的透明性に応じた形態素と文脈の使用方法を示した4つのステップからなるワークシートを使用した推測訓練を行い、また事前と事後の未知語推測テストに取り組んだ。その結果、訓練時は全ての群において不透明な語に対する形態素に基づく誤った解釈は減少した。適切な解釈については、中・上位群でやや増加したものの、下位群では変化はみられなかった。誤答分析の結果、たとえ意味的不一致を把握しても、しばしば誤った推測をしていることがわかった。また、一週間後の事後テストでは、上記の訓練時に見られた効果は全群において保持されなかった。

5つの実験を通して、日本人英語学習者の未知語の理解における形態素と文脈情報の使用傾向および習熟度の関わりを明らかにした。中級学習者は、意味的透明性に応じて、適切な解釈をするために必要な言語的・認知的スキルを有している。ただし、どの程度推測をしようとするか、またどの情報に基づいて解釈を行うかは、未知語の重要性と文脈の特性など外的要因の影響を受ける。一方で、初級学習者の効果的な手がかりの利用は限定的で、これは彼らの文脈理解の不正確さと複数の処理を行うことに伴う認知的複雑さによるものであるという可能性が示唆された。結果を基に、これらの習熟度の影響を考慮した、読解指導における未知語の取り扱い、効果的な推測トレーニングに関する教育的示唆を提案した。

審査の要旨

1 批評

本研究は、中級と初級レベルの日本人英語学習者の意味的に透明・不透明な未知語の意味推測における形態

素と文脈情報の利用を検証したものであり、以下の点を明らかにした。中級学習者は(1) 読解中に形態情報とテキスト文脈の意味関係に敏感であること、(2) さらに意味的に妥当な解釈をとろうとするが、不透明な疑似語に対して、文脈的に適切な意味を付与することは、かなり負荷が高く、誤った形態情報に基づく意味解釈は、通常読解のように未知語の重要性の低い場合は改訂されにくいこと、(3) 適切な理解には未知語の意味が読み手やタスクによって強く動機づけられている必要があること、(4) 時には読解中に、文脈を考慮しながらも、不透明な語について形態情報に基づく意味付与を、文脈情報の解釈を歪曲してまで実行すること。対照的に、初級レベルの学習者は、(5) 未知語の理解における語の透明性に応じた形態素と文脈の利用が極めて限定的であり、意味関係の把握と意味の生成の両者に困難を抱えていること、(6) 推測トレーニングによる一定の効果はあるものの、一週間も経つとワークシートの補助がなければ、推測するすべを失う傾向があること。このように、未知語の理解における形態素と文脈情報の使用状況および教育的効果を、各種実験を通じて解明し、極めて有益である。特に、初学者を対象とした検証は大変希少であり、実験結果から困難性を推定することに留まらず、それに応じた彼らへの効果的な教育的介入を考案し、実証するところまで踏み込んで検証をしたことは高く評価できる。また、複数の実験結果から推測のプロセスと解釈の関係、および習熟度の影響を詳細に議論しており、論文全体を通して、用語の統一、内容構成なども含めて、様々な点で、目配りがよく効いた好論文であると評価できる。

ただし、以下のような課題も残る。(1) 読み手が実験文の読解で、どのようなスキーマを採用して読み始めたかについて統制をとる必要があり、メタ言語知識や未知語の扱いに対する個人の認識など、読解力や習熟度以外の要因との関わりを明らかにすることでより緻密な結論が得られると考えられる。(2) 著者も認めている通り、被験者の心の中の語の意味表象の分析を、**open-ended format** で調査していることには曖昧さが残る。そのため、検討課題 (RQ) を二者択一とする心理言語学的判断課題での実験も、今後必要である。(4) 疑似複合語を目標語として採用しているが、もともと比較的浅いレベルでの形態的处理が可能なものであったと言える。そのため、派生語など複合語以外の語彙項目を対象とすることで、学習者による形態処理 vs 文脈処理の様相を、包括的に検証することが今後望まれる。(5) 目標語の透明 vs 不透明の操作を形態素と文脈の意味的一致・不一致により規定しているが、使用された刺激の中には区別が難しいものもあり、これらを統制していくとともに、読み手がどのような情報に基づき意味的透明・不透明を知覚しているのか、影響を与える要因を明らかにしていくことが必要である。

これらの課題は今後研究を発展させるためのものであり、本研究は英語学習者の読解における未知語(疑似単語)の推測について、詳細な実験を計画し、データ収集を行っており、その着眼点および研究目的は、極めて意義があるものであり、本研究から得られた知見は語彙処理、未知語推測研究の分野の知識向上に大きく貢献すると言える。

2 最終試験

平成 31 年 1 月 22 日、人文社会科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。